

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270102678		
法人名	有限会社 勝法		
事業所名	グループホーム 中川のより道	ユニット名	
所在地	長崎県長崎市の中川1丁目7番14号		
自己評価作成日	平成26年1月1日	評価結果市町村受理日	平成26年3月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://ngs-kaigo-kohyo.pref.nagasaki.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般財団法人 福祉サービス評価機構		
所在地	福岡市博多区博多駅南4-3-1 博多いわいビル2F		
訪問調査日	平成26年2月19日	評価確定日	平成26年3月4日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症への対応の前に、安心・安全な環境の提供、基礎疾患のコントロール、衣食住の生活管理が、重要と考えており、特に栄養状態を良好にすることで健康を保持しつつ、様々なタイプの認知症への専門的な取り組みを工夫している。
更に、長崎県長寿社会課主催喀痰吸引等研修にかかる指導者の派遣等に協力し社会貢献もしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

“中川のより道”では「のんびり、ゆったり、そのひとらしく」という理念を掲げており、理念の中の“そのひとらしく”には、地域の中で“認知症だから”という垣根なく暮らせるように・・という思いが込められている。開設から11年、地道に地域の方との連携を深めてこられ、地域の方の自宅を訪問し、一緒にお茶をする機会も作られている。長崎市地域支援事業のボランティア派遣も活用し、毎週、ボランティアの方がお話し相手などをして下さり、利用者の方も喜ばれている。保育所の子供達との交流も続けられ、色々な行事の案内も頂いている。所長は様々な行事を行っていく事が、利用者の生活の質の向上や社会参加に繋がると考え、地域行事にも積極的に参加し、外出支援も増やされている。行事の企画は担当職員が責任を持って取り組まれており、職員個々のやりがいにも繋がっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	自己評価		外部評価	
		実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	介護内容を話し合う場面や迷った時には、理念をもとにして実践している。	理念の中の“そのひとらしく”を大切にされている。意思疎通が難しい方の指のしぐさも丁寧に把握し、兄弟の方に伝える事で“蚕の糸をつむぐ仕草”と言う新たな情報を知る事ができた。新しい利用者の方にも、ご本人の生活リズムや希望を反映した日課を過ごして頂いている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域へ広報誌を発行する。来所時や散歩時に地域の方が利用者に話しかける、体調を気にかけてくれる、といった場面が増えた。古新聞・古布・紙オムツなどの寄付を地域の方がしてくれる。地域の方が自宅に招いて手作りのお菓子を振舞ってくれたり、自宅の飾り物を見に来るように誘ってくれる。	開設以来、地域に根差した取り組みを続けてこられた。ホームは防犯連絡所と救急サポートステーションを受諾し、ホームの玄関などにステッカーを貼っている。所長が地域の班長会で“認知症や認知症ケア”に関するお話をさせて頂き、認知症の理解を深める取り組みを続けている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議等を通じて認知症の利用者特性や介護方法を地域の方に説明している。認知症の方の対応法を見学者等にも話している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	防災に関するビデオをみて、非常時の避難行動の職員の意識向上になった。	「何かあればここ(中川のより道)へ」と思って頂けるように、会議内容の検討をしている。警察署や消防署の方から犯罪や防火についての講話をして頂き、地域貢献に繋がる会議となっている。行事報告などを通して、参加者の方にもホームの取り組みを理解して頂いている。	保育所の所長にも会議への参加をお願いしている。小学校との交流も検討予定であり、会議の議題にしていく予定である。また25年度に初めて、ホームで看とり支援も行われ、会議の場を通して、ケアの振り返りもしていく予定である。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センターを通じて運営推進会議の議事録や広報誌で中川のより道の取り組みを報告している。	交流を持っている保育所も市立であり、保育所の所長との情報交換も密に行われている。地域包括からの依頼で認知症サポーター養成講座の受講者の見学を受け入れたり、長崎市地域支援事業『生活・介護支援サポーター事業』からボランティアの受け入れもしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	月1回、身体拘束防止委員会を開催し、年2回、身体拘束防止のための内部研修を行っている。中川のより道の独自で、具体的な身体拘束の定義を作成し職員で共有している。	“寂しさ”等の思いにも寄り添い、ご本人が“どの時代”に戻られているかの把握も丁寧に行われている。その時々への対応を心がけ、身体的・精神的不安感をなくすように努めている。転倒のリスクも家族と話し合い、見守りを行うと共に、衝撃緩和マット等も敷いている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止の外部研修に参加している。月1回、虐待防止委員会を開催し、年2回、虐待防止の内部研修を行っている。日々の介護が虐待につながらないかを注意している。		

自己	外部		自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度に携わっている方、数名に支援してもらっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、利用者と家族に詳しく説明し、疑問や不安が残らないようにしている。解約の際も、同様に対応し、理解・納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族との面談の時間を大切にし、隠れた希望があるのではないか、という気持ちを持って臨んでいる。利用者以外の例えば、姉妹・親類の話にも耳を傾け、相談に応じることもある。	面会に来られた時や家族会の時に意見や要望を伺っており、個々の要望に応じて、法事への外出支援も行われている。家族から毎月の報告の仕方への要望も頂き、日々の健康状態や診察の結果を文書でも報告するようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員は、日頃から、利用者の様子や介護の方法について、積極的に発言してくれており、職員ひとりひとりが、よりよい介護について考える、といった全員参加の会議を月1回以上は、開催している。	職員の自主性や勉強への意欲を引き出す環境作りに努めて来られた。資格取得や研修参加に関しても、年々職員の向上意欲が高まり、「学びたい」という思いの職員が増えている。日々の業務でも、職員の意見や特技を引き出すように努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働きやすいように休暇の希望をさく。職員各自のレベルの研修や学習への参加を支援し、長期研修への体制も整っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間計画を立てて、月1回、職場内での研修を行っている。外部講師を招いての、職場内研修を行った。外部の介護員養成機関で、週1回、研修を受講したものもいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会の、月1回、定例の会議等を通して、同業者と切磋琢磨する中で、職員の知識の向上、情報交換に努めている。他事業所の行事に招かれ、利用者や職員が参加した。		

自己	外部	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者や家族の話から、生活歴、嗜好、その他の情報を収集し整理し、職員全員で共有し、会話の糸口としている。また、他利用者との仲を取り持つ工夫をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス導入時に、利用者を深く観察し、家族と密に連携をとり参加してもらうことで、課題を明確にし、早めに解決できるように努力し、より早く信頼関係を築くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	歯科医の往診や歯科衛生士による口腔ケアの定期導入、利用者の身体状況に応じた福祉用具の提案を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ひとりひとりの役割を見出す努力をしており、日々、配膳、洗濯、掃除、裁縫、その他の手仕事などの家事を協力してもらっている。実際に職員も助かり感謝している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族に対して協力して、利用者を支える、といった関係を日頃から説明している。具体的には、家族と利用者との外出が安全に行えるように法事等への参加を同行支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人の面会をグループホーム全体で歓迎している。ゆったりとした、やり取りができるように雰囲気作りを心がけている。思い出話を教えてもらい介護に生かすこともある。	実家のある町を車で散歩されている。よく食べられていた和菓子を購入し、昔話をしながら利用者と一緒に食べられている。友人が訪問された時は、写真を撮影して家族に送るなど、ご様子を伝えるようにしている。馴染みのスーパーにお連れしたり、お寺への参拝支援も行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の「一緒に生活する仲間」として、お互い労わり合いながら、生活できるよう利用者だけの会話等を大事にしている。		

自己	外部		自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も、家族がグループホームを訪れ、利用者と会話をしたり、自宅に実った果物の差し入れをしてくださる等、協力してくれる交流が続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ひもときシートなどを使って、思いや意向を把握するように努めている。利用者の家族や友人から、情報を得ている。バリテーションの手法を使って、思いを探ることも取り入れられている。	利用者同士の会話の中から思いを把握できる時もあり、リビングのテーブルの配置を変更し、会話がしやすい環境作りが行われている。家族には、面会時に日々の状況報告を行い、遠方の方とは電話やメールなども活用している。	日々の生活の中で把握できた情報(生活歴や個別の要望、食事の好みなど)を、より詳細に記録に残していく体制を作り始めている。全職員で情報共有できるように、記録のあり方を検討予定である。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者との会話、家族や友人の話、かかりつけ医等から、生活歴や暮らし方を把握するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中で、ゆっくり会話するように努め、日常生活の様子を細かく観察し、また、ヒヤリハットの情報から、現状を把握することを心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々のカンファレンス、月1回の会議にて、職員間で介護について検討するとともに、家族との面談、その他の関係者との話し合いの結果を介護計画に生かしている。	“自立支援”を大切にされており、食器洗いやゴミ捨て、もやしの根とり、洗濯物たたみ等の役割と共に、商店街での買い物や神社の参拝なども盛り込まれている。主治医や歯科衛生士からの助言も頂き、介護計画に反映させている	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子は、「生活日誌」に記録しており、特に、利用者の発言や様子、具体的な介護と利用者反応が、わかるように記載し、職員間で共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	法事等の席に職員が同行して外出支援する。地域の行事に参加し、踊りのボランティアの方と知り合いになり訪問が実現して利用者が、とても楽しんだ。		

自己	外部		自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣住民から、古新聞、古布、食材等の提供があったり、地域の行事に招待を受けたりして、顔なじみの関係である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	各々の、かかりつけ医と信頼関係が構築できている。かかりつけ医と家族が、面談する機会を持ってもらっている。また、かかりつけ医、家族、管理者、計画作成担当者として面談の機会を持つこともある。	職員の観察力も高まり、日勤帯での早期対応ができています。2週間に1回の往診や訪問歯科診療も行われ、ホームの看護師が主治医との連携を図っている。日々の健康状態や暮らしぶり、受診状況は毎月のお便りで家族に報告しており、家族からもお褒めの言葉を頂いている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	グループホームの看護師自身が観察したこと、介護職からの報告等から総合的に判断し、異常の早期発見、受診ができています。介護職と看護師の協働が、利用者の健康の維持に成果をあげている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関に健康状態を書面で渡し、注意事項に関しては、口頭にて利用者の情報を伝えている。退院時には、かかりつけ医に報告するとともに、今後の介護について相談している。希望があれば、医療機関の説明時にも、同席している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	予測される状態の変化を、かかりつけ医を通じて、家族に説明し、対応について話し合いを持っている。家族の介護に対する希望をきき、共通認識を持つようにしている。終末期に入ってから、さらに密に話し合いの場を持つようにしている。	入居時に、終末期に向けたケアの指針を説明している。25年度は初めての看取り支援が行われ、直前の同意確認書も新たに作成し、意向確認が行われた。職員間で急変時の連絡方法や介護方針を日々確認し、主治医との連携も行い、最期まで誠心誠意のケアが行われた。家族の思いにも真摯に向き合い、一緒に終末期ケアに取り組まれた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	自衛消防隊宿泊研修に、職員が全員参加している。看護師が職員に対し、体調の急変時の初期対応について説明し訓練を行っている。消防局の救命講習を受けサポートステーションでもある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	職員全員が、消防学校にて、自衛消防隊宿泊研修を受ける。今後も、職員に繰り返し受講させ、防災意識の向上、災害時の対応法を身につける。地域住民にも災害時の協力体制を依頼している。	25年4月には消防局職員、警察官なども参加し、防火扉の取扱いやスプリンクラー作動試験が行われた。25年9月以降は、毎月の避難訓練等が行われ、利用者、家族、地域の方、地域包括職員、サポーターの方等が参加して下さっている。災害に備え、個人毎の非常持ち出し袋を準備している。	

自己	外部	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	内容によっては、利用者だけに聞こえるように話をするなど留意している。例えば本人の居室で、1対1で、話すようにしたり、尿便失禁は職員だけに、わかる言葉を取り決めて使用している。	トイレ誘導の際には小さな声で声かけしたり、入浴時の羞恥心を考慮し、タオルで覆うなどの配慮もしている。年長者に対する話し方の礼儀を大切にしており、「利用者の事を考えて行動するように」と職員に伝えている。先輩職員の態度を見て、新人職員も学ばれている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「～はどうですか?」「～はいかがですか?」などの言葉がけを多用し、利用者の思いや希望を、表情や様子から把握するようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者のペースや、本人の生活リズムを優先することが、介護の基本であると考えている。その理念にのっとった、個別対応の介護をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好きな装いをしていただくことを基本に、髪の毛を整える等の整容を、きちんとすることを徹底している。利用者の希望の服を購入したり、外出や行事の際は、化粧をしマニキュアを塗ったりしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の食べたい物の希望をきく、食材の買い出し、下ごしらえ、味見、後片付けなどに、ひとりひとりのちからに合わせて、協力していただいている。	週3日は宅配を利用し、他は職員が手作りしている。旬の食材や季節に合わせた食事を楽しまれており、利用者の方も、もやしの根とりや茶碗洗い等をして下さっている。ソフト食の方も色合い等を工夫しており、職員も一緒にテーブルを囲むように心がけている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量の把握や24時間毎の水分量を記録している。嚥下機能に応じた食形態はもちろんのこと、食欲のないときや、食の好みに関しては、食べやすいもの好きのものなど、代替食を提供するなど、楽しく食事していただけるように心がけている。その他、食器や盛り付けの工夫も行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科医や歯科衛生士の指導のもと、利用者の口腔の状態に応じて、ブラシや歯間ブラシ、スポンジブラシを使っている。自身で歯間ブラシを使っている方もいる。毎日、昼食前には、口腔体操、発声練習を行っている。		

自己	外部		自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	パットを使用している利用者も、トイレで排泄できるように、排泄リズムの把握と、トイレ誘導の工夫をしている。定期的な誘導以外にも、様子を見てトイレに、お連れしている。日中の運動、夜間の保温などにも気を配っている。	排泄時の“恥ずかしさ”にも配慮し、必要に応じて同姓介助も行われ、声かけの工夫をしている。布の下着を着用している方もおられ、トイレでの排泄を大切にされている。歩行が不安定な方も意向を確認し、夜間のみポータブルトイレを使用されている方もおられる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	十分な水分摂取や牛乳、乳酸菌飲料、ヨーグルト、野菜ジュース、果物等を取るようになっている。また、繊維質やこんにゃく、味噌、漬物などの発酵食品の摂取を心がけている。毎日、昼食前の運動も継続しており、利用者のペースで参加してもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	一番風呂、しまい湯、時間帯、外出前後など、利用者の希望を聞いて、入っている。お湯の温度については、職員が、利用者の、それぞれの好みを把握し調整している。	浴室にリフトを導入し、利用者が恐怖心なく、安全に入浴できるようになり、職員も負担が軽減している。洗い場に洗える畳を敷き詰め、もしもの転倒時の衝撃緩和も図られている。入浴中の会話を楽しまれ、歌も聞かれており、季節に応じて菖蒲湯やゆず湯なども楽しまれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	冬場は湯たんぽを利用している方が多く、好評である。就寝、起床は利用者の希望時間としている。眠れない時は、暖かい飲み物を出す、職員が話し相手になる等の対応をしている。家族と相談して、アロマセラピーを活用することもある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は、薬の目的や薬品情報を把握している。また、看護師から、薬品についての知識を得ている。看護師は、かかりつけ医と連携をとり、利用者の状態を、文書にて伝えるとともに、服薬の必要性についても話し合いをもっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	血洗い、洗濯物たたみ、縫い物等、家事の役割を持っていただいている。また、うたを歌う、人形の世話、雑誌を眺める、自室に写真を飾る、家族の写真を眺める、筆筒の片づけをする等、利用者ごとの生きがいを自由に楽しめる支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	利用者の希望に沿って、好きな場所にお連れするようにしている。新たに、リフト車を導入することで、歩行が困難な利用者についても、外出支援できるようになった。家族の法事への参列、生まれ育った町、以前住んでいた土地、昔よく行ったスーパーマーケットなどにお連れした。	所長とホーム長が主に外出支援を担っており、ランタンフェスティバルや花見、水源地での蛍見物、眼鏡橋のあじさい祭り、おくんち庭先回り見物、近隣神社の初詣、ホームの敬老会等、季節に応じた外出をされている。行きつけの喫茶店やお墓参りなどの個別の外出支援も行われ、新大工商店街でのお買い物も楽しまれている。	

自己	外部		自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者が、お金を持つことで、精神的に落ち着く場合もあり、家族と話し合いの上、小額を持っていただいている。また、外出時には、買い物をして支払いもしてもらうようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	娘さんの誕生日に、お祝いの電話を掛けたり、家族からの贈り物に、お礼の電話を掛けたり、お話できる配慮をしている。また、家族からの手紙を部屋に飾り、いつでも見ることができるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	匂い対策として、消臭剤や、EM液を使用。台所、トイレ、浴室で換気扇の有効利用。加湿器等を利用し、温湿度計で確認しながら、居室や居間の管理。季節に合わせて、花を飾ったり、額や飾り物のインテリアを変えている。	リビングで過ごされる方が多い。2つのテーブルの配置を変更し、利用者同士の会話もしやすくなり、それぞれに寛ぐ事ができている。リビングには新聞もあり、毎日、時事の話題を提供している。季節に応じた手ぬぐいを額に入れて飾られたり、リビングの花を話題にして季節の話題に発展する時もある。ホーム内にある階段で歩行訓練されて	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事の時や居間で過ごす時の席は、ほぼ決まっており、気の合う利用者は、隣り同士になっている。お気に入りの場所でテレビをみたり、レクリエーションや家事をしたり、面会の家族との時間を過ごしたりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の使っていた家具や調度品を、できるだけ持ってきていただいている。また、家族の写真、手紙、好きな絵画、ポスターを掲示している。お気に入りの人形を飾っている。	2階と3階に居室があり、エレベーターなどで行き来されている。寝具やタンス、椅子、座布団等と共に、仏壇や位牌、家族の写真等の大切な物も持ち込まれている。大好きな歌手のポスターや写真などを、ご本人が自由にレイアウトされている方もおられる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所を、わかりやすく表示している。筆筒にシールを貼って、中身を表示してわかるようにしている。入れ歯を自分で管理したり、仏壇の仏飯や水を替えたりしている方もいる。		